

森成麟造

漱石さんの思出

漱石さんの思出（抄）

八月十七日病院の応接室で東京朝日新聞社会記者松崎天民てんみんと印刷した名刺を前にして若い洋服の紳士は強度の近眼鏡を掛け乍ながら猶なお且かつ目をテーブルに接着しつつ縷々るる陳述された。その要点は夏目先生が修善寺温泉へ転地療養中痼疾再発し苦悩を訴えて居らるるから誰か即刻往診して呉れと東京朝日新聞社の名に於ての依頼である。

副院長平山金蔵さんに相談の結果兎とも角私かくが直ちに往

く事になった。当時長なが与院長よは病氣ひきこもり引籠ひきこもり中であつたから電話でその旨を報告かたがた旁々往診の了解を求めた処、取次ついでの人の声で「御苦勞乍ら行つて宜敷よろしくして呉れ給え序ついでに温泉に浸つて両三日保養して来給え」との返事であつた。

天民さんは莞爾かんじとして「夫それでは午前十一時新橋発で願います社の坂元君が御伴おとも致しますから」と愴惶そうこう辞去された。汽車はヒタ走りに東海道を駈け上る。夫れでも私達には緩散漫歩おもわの様に思おもれた。三島駅で伊豆線に乗り換かいてから殊更ことさらこの感を深くして神経を苛こら立てた。

之れは過日の東海道大水害の為めで一兩日前漸ようやく復

旧全通した計りばかである。箱根方面は殊に惨害甚しく塔の沢温泉は全滅し流失家屋数戸溺死拾数名と報導されて居る。

一刻も急ぐ吾々の眼には富士の秀峯もにらやまの反射炉も何等反映しない。

私「とて迎もノ口助の汽車ですネ」

坂元「エエそれでもまだ後戻りしない丈だけが取柄ですよ」

終点大仁おおひとで汽車を乗り捨て自動車におさま納る。沿道の児童は一々最敬礼する。大おおいに悠然と構えた。

内心すこぶ頗るじくじ忸怩たらざるを得ない。

史跡にも気候にも恵まれた修善寺温泉へは、しばしば高貴の御方が御成り遊ばさるる為め菊屋旅館が高級自動車一台を奮発して御乗用に供したので伊豆半島唯一の自動車である。「中略」

私達は午後五時頃得意然として菊屋本店の玄関へ下り立った。

取敢えず女中に導かれて漱石さんの室へ通る。十五畳敷の中央に仰臥して居らる。憔悴した漱石さんの打ち凹んだ眼底には、満足と安心の色が漂い枕頭に侍はべって不安

に駆られつつある東洋城さんにも大に安堵の風が見えた。

而して御兩人の談話を綜合すれば大略次の経過を物語る。

北白川若宮様が菊屋別邸に御避暑遊ばされたので、式部官の「松根」東洋城さんが随行仰せ付けられ当地に滞在中漱石を誘われたのであった。

「東洋城が居るから万事安心して静養出来る」と喜び勇んで菊屋本店へ転地されたのは八月八日である。最初は大に温泉情緒を味い、気分も頗る爽快に、食慾も頓とみに

充進したが数日前より稍^{やや}不快を感じて来た。

ここの温泉宿は全部伺い料理で一日三回献立定価表を各客室に持ち廻り一々注文を承るのである。処がその料理たるやカツレツはかみ切れない程の板状で、お刺身は三センチ立方位の肉塊である。最初胃に微鈍痛を覚え当地野田老医の診察を受けたが漸次増悪^{ぞうあく}して遂に吐血を見るに至った。

松根さんは宮様の御用の暇を見計っては漱石さんの看護に勉められたがどうも症状は思わしくない。

「私が全責任を負いますから修善寺へいらっしやい」

と極力すすめた関係上、東洋城さんは気が気でないので朝日新聞社へ電話で万端手筈を打合わした結果私は只今この室へ顔を突^{つき}ん出した次第である。

アイスクリーム一つ平らげて診察に取り掛った私は、「オヤツ？」と内心に絶叫した。

病勢甚だ険悪の兆が見えたからである。

私はハツと困惑し全くゲレンコに陥^だった。この険悪の状態にある患者を振り捨てて私^だ丈^かけが如何にして帰京出来ようぞ、^{しょうび}焦眉の救急処置は絶対安静が唯一の必要条件であって、移動は思いも寄らぬ事柄であり従って東京へ

連れ戻るなど杯徹頭徹尾不可能に属する。

然し乍らなが治療上不便な且つ騒々しい旅館におく事は、甚だ気の毒であると同時にこの書入れ時期どきに病人を置く宿の主人に対して非常に同情に堪えない。

去り乍ら入院さすべき適當の医院なきを奈何いかんせんやだ。

或は数日後の急変に？ このまま？ と不幸な転期も想像されない事もない。私は一兩日の予定で、且つ時間切迫の關係で同僚諸君に碌々ろくろく引継もせずに来たのであるから、唯徒いたずらに何日になれば連れ戻り得るか予想も付

かない患者を擁して便々と幾日迄も逗留を許されないの
であるが、省みればこの憐れなる患者をこのまま放擲し
て歸京するは情に於て迎も忍び難い事である。

私は全く窮し適応の進退に行き詰った別室で松根、坂
元両氏と鼎座協議を重ね大至急奥さんに来て頂く事にし
た。

松根さんは早速病人の枕頭に、私はその儘沈思黙座、
今後に処すべき治療方針に就いて考慮した。

兎も角も胃腸病院へ詳細なる病状を報告するに先立つ
て諸般の準備と薬剤の打合せとに野田医院を訪れた。

約一時間を経て私は薬瓶をブラ下げ乍ら菊屋へ帰ってもまだ坂元さんは受話機を握って東京朝日新聞社とお話中である。

私は医者と看護婦の役目を受け持ち、坂元さんは事務を担当する事に約束して、その夜は病人を真中に私共は左右に床を並べた。

翌晩は廿日盆で煙花大会があつた。溪谷を隔てた対岸の修禅寺しよぜんじや精舎しよじやから一発二発と打ち揚がる花火は、両国の川開くわいに比くらぶれば貧弱なものではあるが、温泉情緒の一景物として聊いささか病苦を慰め得べく高欄近くに病床を曳

き出して漱石さんを中心に煙花見物を催した。

丁度宿より冷えた西瓜を山盛に呉れたので漱石さんにその汁丈^だけを進めた。

大空に輝く燦爛たる閃光に眩惑されながら一同パクツ
イて居る間にどうした機勢^{ハズミ}か漱石さんは西瓜の種子を一
粒^{えんげ}嚥下した。

コリヤ、シマツタ？ と後悔したけれども最早^{もはや}如何と
も致し難い。

その晩は内心^{すこぶ}頗る不安に駆られつつ私は夜を明かした。

壁間の軸は某將軍の劍戟云々の詩で欄間に掲げられた扁額は後藤新平さんの書である。

今を時めくこの大臣の少年時代は我長わが与称吉先生の子守小僧であった。今や長与先生は腹膜炎で日一日と余命を削られつつ夫れそでも猶なお漱石さんの病状を案じて居られるのである。

私は感傷的にならざるを得ない。廿一日正午頃奥さんは来着されたので一同安堵の胸を撫で下し留守番から漸く開放された様な気分になった。

奥さんのお話に依ると、お子さん達が茅ヶ崎に避暑中

過日の大水害があつたので夫れを見舞に行かれた後へ
 吾々の電報が東京、茅ヶ崎、横浜と奥さんの後計りばか追つ
 たとの事である。

私は早速自分の苦衷を披瀝した所奥さんは意外な事を
 聞くものかなと云つた表情で「夫は甚だ困る、何んとか
 都合して呉れませんか」と口を極めて抗議を申された。

御ごもつとも尤なお説で私は一言半句も継げない。早速院長に
 宛て

ナツメ ヤマヒ キケン ボクカヘルヤイナヤ モ
 リナリ

と打電した、折返して

ソノチニ トゞマリ カンゴニドリヨクセヨ

と厳命的な返電を受取った。

好^{ヨシ}的、飽く迄頑張って最善の努力を試みよう。夫れにしても私一人では甚だ懸念だから一応大家の来診を求めて今後の対策を講じようと決意した。

例に依って坂元さんは再び電話室へ閉じ籠って東京と交渉される。私は直ちに病院に宛て

フクヰンチャウノ ライシン タノム と打電した。

この夜遅く渋川玄耳げんじさんは両朝日新聞社を代表して見舞われた。而そして如何なる犠牲も吝おしまないから万全の秘術を尽されたいと申出られた。

廿二日、廿三日は稍やや小康を保ったので看護を奥さんに依頼して午後一時間許ばかりずつ坂元さんと散歩した。

廿四日午後五時頃杉本副院長が来診された。私は責任の一半を解除され肩の重荷を下ろした様な身軽さを感じた。

杉本さんは頗る呑気な顔で「大丈夫です間もなく御帰京出来ますよ」と断定したので一同愁眉を開いた様に見

受けられた。

杉本さんと私は本館二階で今や浴後の一盞を傾げんとした刹那、中庭を隔てて彼方の病室から、けたたましく「誰か来て下さいよ？　森成さん？」と絹を突ン裂く様な奥さんの声がした。

周章狼狽して駆け付けた時は、真紅の血が迸り散つて惨状目も当てられぬ。室の中央に奥さんの膝に俯臥して居られる蒼白の漱石さんを見出したのである。

私は突差の間に漱石さんに寄添って無意識に手を取った。

予^{かね}て用意の注射を準備しつつ「お気分は如何ですか」と問うて見た。

目を閉じた儘^{まま}「ハア楽になりました」と微かに返答があつたので稍^{やや}安心し乍^{なが}ら注射した。

杉本さんも手伝^とつて兎も角^{かく}漱石さんを蒲団の上へ安静に寝かし様子如何^{いかに}と看守^{かん}つて約十分間位経つたと思う頃再びゲーツと響^{かん}く乾嘔^{おう}と共に反側^{はんそく}して仮死の状態に陥り脈搏がバツタリ止つてしまった。

サア大変！ 万事休矣^{きゆうす}！

私は胸中搔^かき撈^{むし}らるる如き苦悶と、尻が落ち付かない

様な不安とに襲われ、全身名状すべからざる一種の圧迫を感じた。この現象は畢竟^{ひつぎょう}自分が大狼狽して居る結果で、この危急の際僕迄が狼狽しては駄目だ、と悟った瞬間反撥的に度胸がクソ落ち付きに落ち付き払った。目前に横たわる蠟細工の病体を冷静に物質視するとドツカと^{あぐら}胡坐をかいて猛然ズブリズブリと注射を施した。

コレデモカ？　コレデモカツ！　と力を籠めて注射を続けた。

病人の腕を握って検脈して居られた杉本さんは、突然「脈が出て来た!!」と狂喜して叫ばれた。

成程小さい脈が底の方に幽かすかに波打って居るではないか。

この時の喜び！ この時の気持！ 只々ただただ両眼から涙がホロリホロリ滲こぼれ出るのみである。

私はこの一大難関を突破して、歓喜と神明の加護に対する感謝とに満ち満ちて、元気好く再び注射を繰り返したが然し次の不安が心底から湧き出でた。

- 1 この儘まま順調に恢復し得るであろうか
- 2 予後は如何いかん
- 3 万一気の毒な事情に到達する前に子供衆に一日な

りと逢わすべきや否や

この相談は勿論独乙語ドイツではあるが、注射を続け乍ながら杉本さんと私との間に応酬されたのである。突然病人は瞳を視張って私を視詰めながら「私はまだ死にませんよ」と云って再び瞑目した。

何んたる皮肉の事だろう！ 何どうして斯かく迄皮肉に出来上って居る病人であろう？

悲劇喜劇の衝突とは正にこの場面である。一同に歓声が揚り宿屋全体が万才で揺いだ。

私は始めて我に返り周囲を見廻した。今迄私の念頭に

は病人と杉本さんと自己の三体以外に何物の存在をも認めなかつたのである。否、世の凡てすべを全然忘れ果てて居たのである。脈は幸い次第次第に力強く顕われて来たので、今度は亡血ぼうけつ補充の目的を以て食塩注射を行う為め野田医院へ使を走らせた。

リングエル氏液は既に準備してあるが、肝心の注射器はまだ東京から到着して居ない。止やむを得ず破損したイルリ―ガートルを唯一の武器にこの闘病の第一巻は了つたのである。

奥さんは枕頭に、坂元さんと私は漱石の両手を握った

まま夜を徹し、杉本さんは心配顔に夜半二、三回回診された。

ふつぎょう 払暁 杉本さんは帰京された。大至急附添看護婦に薬品と医療器械とを持参させる約束で。

その後は私は病人に関する一切を引受けた。看護婦が来着する迄の二日間は全く無我夢中で働いた。

病人に冷水を飲ますべく階下へ降りて、僅か二合入の土瓶を持って十二、三段の階段を登る事さえ頗る苦痛となった。二、三段登っては休み四、五段登っては小憩しなければならぬ程呼吸促迫し心悸亢進し^{とて}迎も胸苦しか

った。

斯こンナ事で意気地がないと切齒しても、事實これ是が動か
ない。心身全く綿の如く疲れ果てて時々眩暈めまいさえ覚ゆる
に至った。

第一着に駆け付けたのは、安倍能成（目下京城大学教
授）さんである。腸チフス全快後沼津で静養中の夢を電
報で呼び起され、愴惶そうこうとして見舞われたのは大患の翌払
暁であつた。

この人の名はアンバイヨクナルとも読み得るので、
我々一同は快癒の瑞兆だと縁起えんぎ談ばなしに喜び、安倍さんは

まだ蒼白い顔で「ソレでは僕の名前が功一級に価するのだ」と微笑しつつ三、四日間坂元さんに代って事務を処理された。

松根さんは宮様に随行中で、京都から数日遅れて戻って来た。その他親類の人や、友人の方、御弟子さん達が数十名一時に来訪せられたので菊屋は勿論新井館も時ならぬ雑踏を極めた。新井館の息子さんは、画家なるが故に美術家文士教育家等の客人が多いとの話であった。

見舞客には色々の名士が多いが、今一々覚えて居ない。

〔中略〕

斯^かくして愈^{いよいよ}々帰京の日が近づいた。而して漱石さんは時々思い出した様に一日も早く帰って長与院長にお礼を申し述べたいと云って居られたのである。（昭和七年、八年発行の「久比岐」掲載より抜筆）

（『頸城文化』第八号、昭和三十年十二月）

日本文学電子図書館

漱石さんの思出 (抄)

著 者：森成麟造

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館